

大島まり委員（東京大学大学院情報学環・東京大学生産技術研究所教授）

追加意見（2022年3月22日）

今村委員、隅田先生のご発表いただいた取り組みについては、特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方について、**Good practice** として示していただき、大変有意義な発表でした。

以前の議論にありましたように、特定分野に得意な才能をある児童に対して、特別視するのではなく、社会全体で育成していくことの重要性を改めて感じました。

以下3点です。

1. 特定分野に得意な才能をある児童をどのように発掘して認定するかということが大事だと思います。**GSC** およびジュニアドクターに関わり、早期に探究学習に触れ、自分で考える力を身につけることは大事だと感じています。**GSC**、そしてジュニアドクター育成塾の生徒のなかには優秀な子どもがいますが、特異な才能と言えるかは疑問を感じます。しかし、学校の勉強のレベルを超えて高度な内容の学習をしたいとの意欲が強く、また、出来る能力の高さを有しています。このような子どもの位置づけをどのように定義するのは、悩ましいです。
2. 1のような意欲があり、能力の高い生徒を誰が育てるのか。**GSC** およびジュニアドクター育成塾は **JST** から受託事業として東大で受け、東大で指導しています。最近、学会発表やコンテストの受賞者も増えています。研究者になり、将来何らかの形で社会に貢献したいと思いの生徒もいる一方で、**AO** 入試や海外留学に向けてのプロジェクトとして行っている生徒も見受けられます。このような生徒は優秀ですが、国のお金で国立大学が教育してよいのかという疑問も感じます。教育格差にもつながりかねなく懸念しています。
3. 共創の場の形成の重要性は増すのではないかと思います。個人の能力をのばすだけではなく、優秀な子が学んできたことを他者に還元するような仕組みが必要なのではないかと思います。その際に、カタリバあるいは大学などの学校外での **Third Place** を共創の場として形成し、生徒の時は受ける側でも、大人になったらボランティアとして活動に参加するなど、「つなぐ」ことが大事だと思います。もしくは、お金を寄付するなど。精神論になりますが、そのような概念はあまり日本にはないので、醸成していくことは大事だと思います。